

<資料紹介>地図フィールドツアーの実施報告 (1) : 「流山おおたかの森」から「柏」へ

今和泉, 隆行 / 梅崎, 修

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン : 法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies

(巻 / Volume)

15

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

193

(終了ページ / End Page)

200

(発行年 / Year)

2017-11

地図フィールドツアーの実施報告(1)

—「流山おおたかの森」から「柏」へ—

地理人 今和泉隆行

法政大学キャリアデザイン学部教授 梅崎 修

1 はじめに

本稿は、地図フィールドツアーの実施報告である。地図フィールドツアーとは、事前の予習なしに当日地図を見ながら出発地点から到着地点まで、「あるく・みる」だけの短期フィールドワーク教育である。梅崎ゼミでは、これまでも今和泉が大学内で地図を使ったワークショップを行っていた(今和泉・梅崎(2016・2017))。これらのワークショップは、本格的な研究のためのフィールドワークの前に「地理的想像力」を鍛えることを目的としていた。

地図を使ったワークショップをはじめた理由は、学生たちの行動範囲があまりにも狭く、取材地域の理解が深まらないこと、またフィールドワークの中でもインタビューが中心になると、いくつかの取材先を<点>として理解するだけで地域を<面>的にとらえることが難しくなるという問題意識を持っていた。

地図を使ったワークショップは、縮小していると思われる大学生たちの「地理的想像力」を再度拡張し、「社会」を面的に認識させる教育実践であった。加えて、地図を読むことは、そこに描かれた人の営みや社会の仕組みを想像することであり、実際の訪問・聞き取りは、その想像された社会像を確認しつつ、時に違いを見つけ、再度、社会を想像しながら地図を読むという一連の相互的行為と考えたからである。

本稿は、そのような大学内でのワークショップからさらに一步進めて、大学外での調査教育の実践報告である。この地図フィールドツアーでは、地図をベースに「あるく・みる」ことに焦点を絞った。広義の意味でのフィールドワークであるが、テーマを決めて調査や分析を行う研究のためのフィールドワークとは異なる。地図フィールドツアーは、事前に研究テーマを決めないし、調査能力育成という目的が中心になる。

一般的に演習活動で行われるフィールドワークでは、調査前に研究テーマについて教室内で議論し、文献・資料などで情報収集した後に、質問項目作成などの調査の準備を行う。その後、実際にフィールドワークをすることになる。ところが、今回企画した地図フィールドツアーは、事前に参加者がテーマについて議論しないだけでなく、当日、集合地点だけを教えただけで、最終的にどこに向けて歩くのかも知らされない状態、また「あるく・みる」ことだけで「きく」ことはしないという条件で開始された。

意図的に事前準備なしで地図フィールドツアー開始したのは、そのような目的(テーマ)先行のフィールドワーク(教育)が、純粋な事実観察を曇らせる危険性もあると考えたからである。研究テーマに囚われ、論文の予測される結論(仮説)に関連する情報ばかりを集めてしまうというフィールドワークの問題がある。つまり、「みる」前に「きく」、さらに「きく」まえに「結論」を

出してしまうのである。そうであるならば、「あるく・みる」だけから、どれだけ情報が得られるかを訓練できる調査能力育成プログラムを作ればよいと考えたのである。「あるく・みる」ことだけで情報を入手すること、具体的には地図と実際の土地を比較しながら風景を感じ、読み解く楽しさを喚起できるのが、地図フィールドツアーの特色である。

もちろん、このような地理と風景を読み解く教育実践自体は、我々の独創でもなく古くからある。たとえば、松岡ら編（2012）によれば、地理学教育では、巡検と呼ばれるフィールドワーク学習蓄積がある。地理学では、フィールドワークを巡検と調査に分けており、前者では観察や見学が強調されている。松岡ら編（2012）は、巡検の特徴について以下のように説明している。

「巡検は、調査ほどの高度な能力は必要なく、時間数が少なくてすむという長所がある。特定な事象だけでなく、いろいろな事象を取り上げることができる点も長所である。ただし、観察の焦点がはっきりしないという欠点がある。(p.3)」

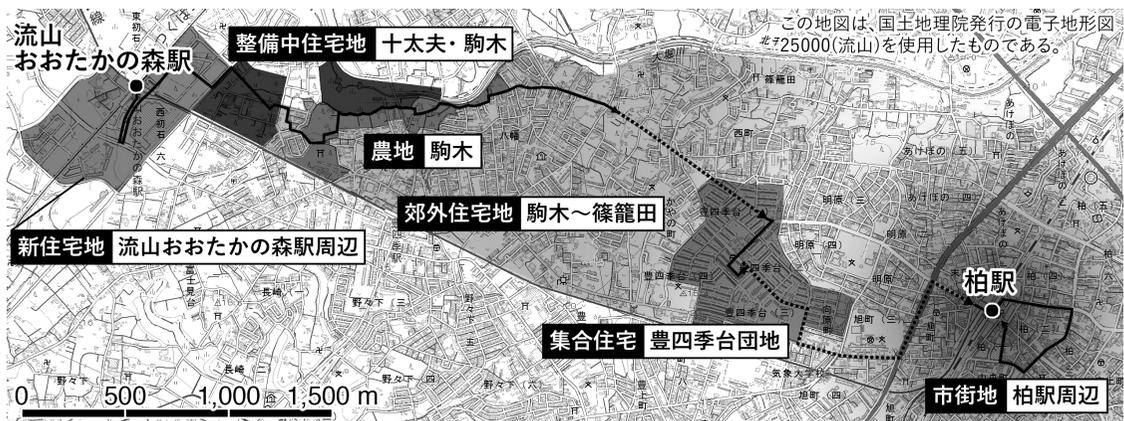
松岡ら編（2012）の教育実践例によれば、巡検は、本稿の教育実践と似ているが、事前学習の有無において違いがある。巡検は、地理学の学習を目的

としているので、事前学習を重視し、地理学知識を基にフィールドワークを行う。一方、先述した通り、調査能力を育成するための地図フィールドツアーは全く事前学習なしに行われる。巡検においても、体験による理解、直感による理解、五感による理解は重視されているが、これらの点を特に重視したのが地図フィールドツアーと言えよう。

ところで、風景を読むことに関しては、宮本常一が撮影した写真群という文化的遺産がある。宮本（2001）などを読めばわかるように、民俗学者である宮本常一は、聞き書きとともに写真を撮ること、さらに写真（＝風景）を読み解くことを重視していたことがわかる。そして、風景を読むための調査経験、民俗・歴史の知識、および能力（民俗学的知性）を身に付けていたのである。宮本常一から直接教えを受けた香月洋一郎氏の著作によれば、宮本が彼の教え子にどのように風景を読む力を教えていたかを理解することができる（香月（2013））。それは、まず写真を見せて、その解釈を試みさせることの繰り返しであった。むろん、本稿の実践は、そのような膨大な調査経験や民俗学知識によって支えられたものではないが、風景を読むことの楽しさを刺激するフィールドワーク教育の可能性を探る実践と言えよう。

なお、本稿の構成は以下の通りである。続く第2節では、地図フィールドツアーのルートを紹介

図1 地図フィールドツアーのルート



資料出所) 国土地理院発行電子地形図 25000 (流山)

する。第3節では、ルートに沿う形で風景の読み方の例をあげる。最後に第4節では、地図フィールドツアーの振り返りを行う。

2 ツアー・ルート紹介

ツアー・ルートを図1に示した。今回は、千葉県の流山おおたかの森駅から柏駅までの約5kmの間を移動した。法政大学のOBOGや今和泉の知り合い数名に声をかけて、合計8名でツアーを開始した。参加者はOBOGや社会人なので、学部生よりも知識や経験はある。

地図フィールドツアーは、集合場所の流山おおたかの森駅だけは伝えられたが、その後のルートについては伝えていない。事前の知識なしに「あるく・みく」ことによって何を感じるかを課題とした。流山おおたかの森駅に到着の時点で地図を配付し、柏まで移動することを伝えた。また、歩きながら写真を撮影してほしいと伝えた。

流山おおたかの森駅は、2005年に開通したつくばエクスプレスの主要駅で、鉄道が開通してからできた新しい街である。一方、柏駅は水戸街道沿いだったが宿場町ではなく、明治時代に常磐線の柏駅が開設され、大正時代に東武線が開通し、乗換駅になったことで発展した、比較的古い街である。古くからの市街地は、道も狭く建物も小さく密集しているが、新しい市街地は、道が広く、建物も大きく、建物間の間隔も広めにとられている。また、もともと市街地だったところは僅かで、このあたりのほとんどはもともと農地である。もともとの農家と、首都圏の人口増で増えた住宅群が混在している点が柏の特徴である。これは大都市圏郊外ではどこでも見られる現象だが、2000年代に入ってから大規模な市街化、宅地化を遂げたところは珍しいと言えよう。宅地造成前、中、後の様子を見て取れるのがこの地域の地図フィールドツアーの魅力と考えてこの場所を選択した。

実線は徒歩で、点線はバスで移動したルートである。「新市街地」流山おおたかの森駅周辺はつくばエクスプレス開通後の住宅地、「郊外住宅

地」駒木～篠籠田（しこだ）は、つくばエクスプレス開通前から住宅地だったところである。「農地」駒木は、農地と農家が広がるところで、宅地化する前のこのあたりの姿が見て取れる。「整備中住宅地」十太夫（じゅうだゆう）は、農地が広がる中で宅地が点在していたところだったが、流山おおたかの森駅開通後、宅地整備が進行中である。先述したように、そのような情報は参加者には、事前に伝えず、それぞれの風景の差異を見つ、地図上でそれがどのような模様かを確認することを試みた。

地図フィールドツアーのゴールは、柏駅近くの貸し会議室である。この教室にあつまり、参加者間で観察記録（写真）を見せ合い、お互いの実感を語り合った。

3 「風景」を読む

本稿では、流山おおたかの森から柏までのツアー・ルートに沿って、代表的な風景写真を紹介し、その写真の一つの読み方を紹介したい。これらは、風景を読む解答ではなく、あくまでも一つの解釈であるが、地図を前提に写真と解釈と並べることで地図と風景の読み方の可能性を提示したい。

風景1-ABは、流山おおたかの森駅周辺である。「新市街地」である流山おおたかの森駅周辺は、集合住宅を中心に、新築住宅が並んでいる。もしくは、住宅が建設中であったり、販売中であったりした。そして、道路が広いのが特徴だが、車道も歩道も広い。さらに広場や公園があるため、オープンスペースが広いのが特徴である。集合住宅の1階には保育施設が併設されていた（風景2）。実際に歩いてみると子育て中のファミリー層が多いが、確かに子育てをする環境としては適しているのだらうと思われた。

また、新築住宅が並ぶ街並みであるが、野菜の直売所が発見できたので（風景3）、畑が近くにある、もしくはもともと畑であったことを想像することができた（その想像は駅から離れることに

風景 1-A



風景 1-B



風景 2



風景 3



風景 4-A



風景 4-B



よって確認された)。

続いて、風景 4AB は、「整備中住宅地」の十太夫・駒木の周辺である。この地域を回ると、で

きたての道、住宅もあるが、古くからの家や農地も混在していることがわかる。左の写真は、手前の道に対して斜め向きに建っているが、この道は

風景 5-A



風景 5-B



風景 6-A



風景 6-B



新しい道で、家は古い道に沿って建てられている。右の写真は新築の住宅が多いが、こちらは新しい道ができてからの住宅である。比較的古い家は新しい道路ができる前からの家で、新しい家は新しい道路に沿って建てられているという「法則」を確認できる。ここが駅徒歩圏の住宅地になってからの住宅と、そうなる前、農地が広がる中に建っていた住宅と、異なる時代の風景が見て取れるのである。

さらに、流山おおたかの森駅から離れると、建設中の道路や、住宅は建ち始めているがまだ土の多い風景も見られる。風景 5-AB でも確認できるように、土も多いが、周囲は新しい道路で囲まれている。つまり、「変化中の風景」と言うことができる。宅地化するのも時間の問題と言えよう。

それでは、このあたりの原風景はどのようなものだろうか。風景 6-AB は、地図上での「農地」である駒木のあたりの写真である。ここでは宅地化しておらず、農地や雑木林はあるが、その面積はかなり狭まっている。一方、道は細く屈曲しており、農地であれば道路と道路の間隔は密である必要はないので、近くの隣の道路までの距離が遠くなったと解釈できる。そのことは地図からも読み解けることなので、風景 6-AB を見ながら、道路を地図という俯瞰の視点で確認した。

風景 7-AB は、そんな農地の中にある農家である。農家は都市化してからの住宅とは異なり、面積はとても広い。敷地の中には母屋だけでなく倉庫もあり、入口から母屋までの距離も長い。左の写真の建物は古くから建つ母屋であるが、右の写

風景 7-A



風景 7-B



風景 8-A



風景 8-B



風景 9-A



風景 9-B



真の母屋は新築である。新築してもなお、都市化してからの住宅とは明らかに様相が異なることが確認できる。

続いて、風景 8-AB は、「郊外住宅地」駒木～篠籠田の様子である。農地が広がっていた時代から続く屈曲した道路沿いに戸建て住宅が密集す

風景 10



る。一部農地も残るが、これは区画整理を行わずに、徐々に都市化の勢いが及んで宅地化した結果と解釈できる。これは首都圏郊外に大変よく見られるパターンであり、このあたりでもかなり広いエリアがこの様相である。道がカーブしているほか、右の写真のように行き止まりも多いのである。

この風景の成立理由を読み解けば、もともと農地であれば道路と道路の間隔、1区画が広いが、住宅の面積は狭いため、住宅を敷き詰めるとどの道路にも面していない住宅ができてしまったと解釈できる。そこで新たな道路が敷かれるが、それがどこかの道と繋がることなく、奥の住宅群にアクセスするための行き止まりの道で終わることもある。地図上でも、直線状の行き止まりの道があ

れば、そこはあとで宅地が増えたのではないか、ということが読み取れる。

風景 9-AB は、「集合住宅」の豊四季台団地である。団地造成から50年以上が経ち、現在建て替えが進行している。左の写真は建て替え前の住宅で、右の写真は建て替え後の住宅である。この比較を実際に見ることで、空間の中に「時間的な軌跡」を読み解くことができる。現在その双方が混在している貴重な時期だが、いずれ右のような集合住宅群に置き換わると予測されるので、過去・現在・未来という時間軸が見えるであろう。建て替え後の集合住宅は、少々高層化しており、今風のマンションであるが、どこか「公団住宅」らしさを残しつつ、外壁の形状や彩色が民間のマンションとは異なる。URは公団住宅の次の形を模索しているようにも見える。

また集合住宅群の中心には、建て直しされた新しい商店街と昔からのスーパーが併設されていた（風景 10）。集合住宅群の中の人口、駅からの地理的な距離などを想像し、集合住宅内の商店街の利便性を想像できた。

風景 11-AB は、柏駅周辺である。柏駅ができたのは明治時代であるが、大正時代に現在の東武野田線（アーバンパークライン）が開通したことでターミナル駅になり、現在でも多くの人を集めている。左の写真は柏駅ビルの高島屋ステーションモール、右の写真は駅南側の旧水戸街道である。

風景 11-A



風景 11-B



ここには古くからの個人店が並んでいるのが分かる。また、細い道に入れば、郊外に比べて小さな住宅が密集していることを確認できる。

ここでは建物と建物の間隔が狭いだけでなく、建物と道路の距離もほとんどないことがわかる。住宅地図であれば地図上で建物の大きさを確認できるが、建物の大きさが確認できない一般の地図でも、細い道路が密集し、道路と道路の間隔が狭ければ、古くから都市化し建物が密集している様子が読み解ける。

4 おわりに

地図フィールドツアー終了後に参加者たちに感想をたずねると、最初は何をやるかわからず、戸惑ったけれど、歩きはじめると意外と楽しかったという反応が多かった。当日、初めて会った人も多かったので、打ち解けられるかどうか心配したが、実際、一緒に歩きながら風景を感じながらその感想を言い合うと自然と打ち解けられた。風景の読み方については、今和泉が風景読解のヒントを出していった。

地図フィールドツアーを振り返ると、風景を読むことの楽しさに気づき、その気づきを共有できる点がこの実践の利点と言えよう。さらに、柏の貸し会議室では、お互いの写真を見せ合うことで、同じルートを歩いても異なる風景に関心を持っていたことも確認した。このような写真を使った意見交換は、多様な視点を相互学習する振り返りと言えよう。五感を使い観察し、気づいたことを表現し、他人と共有し、そして個人差から相互学習

するという過程が地図フィールドツアーから生まれていたと考えられる。

なお、今回選んだ「流山おおたかの森駅―柏駅」というルートは、地理フィールドツアーの実施場所としても適した場所であろう。観光スポットや歴史遺産はないので、参加者の目線がそれらに集まってしまうという観察上の問題はない。歩く距離も適当であり、そのルートの中に土地開発の〈時間〉を〈地層〉のように読み解くことができる点も魅力である。この土地は現在急速に変化しているが、その変化があるからこそ、地図フィールドツアーをする価値があると言える。このような教育実践に興味がある教育関係者にこの実践報告が少しでも役立てば幸いである。

参考文献

- 今和泉隆行・梅崎修 (2016) 「〈研究ノート〉 地図を使ったフィールドワーク教育実践 (1) ―想像地図散歩ワークショップ」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第13号 pp.143-156
- ・————— (2017) 「〈研究ノート〉 地図を使ったフィールドワーク教育実践 (2) : 空想地図づくりのワークショップ」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第14号 pp. 201-226
- 香月洋一郎 (2013) 『景観写真論ノート: 宮本常一のアルバムから』 筑摩書房
- 宮本常一 (2001) 『空からの民俗学』 岩波現代文庫
- 松岡路秀・今井英文・山口幸男・横山満・中牧崇・西木敏夫・寺尾隆雄編 (2012) 『巡検学習・フィールド学習の理論と実践』 古今書院